

理解できない男の子のアタマの中

思春期になると、子供との向き合い方はとても難しくなります。それまではよくしゃべりながらまとわりついてきたのに、なぜか口数が減り、反発を繰り返すようになる……。

とくにお母さんにとって不可解なのが、「男子」の思考や行動でしょう。相手が女の子なら、自分の経験に照らし合わせてどうにかなるかもしれません。しかし、男の子の場合は、異性であることに加え、思春期特有の特徴が現れるため、どう接したらいいのか戸惑ってしまうようです。思春期における男女の違いはいろいろな面で挙げられますが、ここでは「精神的な成長」についてふれてみます。

女の子は、比較的早い時期から「自己抑制」を効かせがちです。そのため、自分を過小評価したり、自分の可能性を限定して考えたりする傾向があります。言葉を換えれば、早い時期から「守り」に入ってしまう傾向があります。

一方、男の子は、女の子と比べて精神年齢が幼いと言われます。けれども、その幼さが良い方向に発揮されると、途方もないエネルギーになることがあります。

最近子供たちがよく使う言葉を借りれば「ワンチャンある」という感覚を、ある程度成長した後も心の中に秘めていて、それによって自分の可能性を広げることができるのです。

現実的なお母さんたちは、それを「根拠のない自信」と呼ぶでしょう。でも、自信ほど大きなエネルギーにつながるものはありません。その点は、男の子が持つ可能性のひとつと言えるのではないのでしょうか。

そうした思春期の特徴を考えると、日常生活の中で「言うてはいけない」「言わないほうがいい」というフレーズがいくつもあります。

たとえば、子供がだらしない服装で帰ってきたり、家の近所でハメを外していたりしたときに、「お母さんが笑われるのよ！」としかるケースは多いでしょう。

気持ちはよくわかります。「あなたの行動は第三者から見ればとても目を引く行為だ。でも、私が恥ずかしいからやらないでほしい」ということでしょう。

しかし、「判断基準」を第三者に求める言い方は無責任です。子供も「他人」を都合よく利用するような親に不信感を抱くものです。「お母さんがしかられるのよ」というフレーズも、同じ理由で避けるべきだと思います。

子供のしたことが許せないのなら、「私はあなたのそういう行為は嫌い」とはっきり言えばいいのです。わざわざ他人を介入させる必要はありません。しっかりと諭すためには、主語は常に「私」か父母を指す「私たち」にして、親自身の視点から率直に話すことが大事です。

他にも「男らしくないわね」という言葉がけも要注意。性別によるイメージや役割分担を固定化するようなフレーズは、これからの社会にはそぐわないでしょう。

思春期というのは感受性が豊かな時期ですから、親が発した一言が後々まで心の中に残り続けることもあるのです。